

Second Asian Conference on Vision 参加報告

篠森敬三

高知工科大学 情報システム工学科

1. はじめに

2001年7月30～31日に行われた First Asian Conference on Vision に引き続いて、2002年6月22～24日に Second Asian Conference on Vision が韓国の慶州 (Gyeongju) のヒルトンホテルで開催された。参加者は日本から (日本で活動している外国籍の方を含む) 93名、韓国から41名、中国 (香港を含む) から7名、アメリカから3名、インドから2名、イギリスから1名の合計147名であった。発表は、プログラム上の件数で (以下同じ)、招待講演3件、口頭発表35件、ポスター発表77件の合計115件であった。もっとも、実際はパスポートの関係で来韓出来ず、発表がキャンセルになったものが5件程度あった。日本視覚学会と連続日程で開催された去年と比べると、単独開催の今年は参加者こそ209名から減少したが、発表件数は67件から倍近くまで増加した。これは学会を準備した韓国側関係者と宣伝に相務めた日本側関係者の双方の努力の賜物だと思う。ACVは2回目にして順調な発展を見せているといえよう。

前回については、実行委員長の金子寛彦氏より運営の難しさなども含めて報告されている¹⁾。金子氏の参加報告はACVに限らず、今後学会を準備・運営していく時に大変参考になるものである。ただ今回は視点を変えて、1人の参加者の立場からの報告としたい。なお本報告内で使用する写真はACV 2002組織委員会の依頼により Soo-Yeoun Yoon 氏 (Yonsei Univ.) により撮影されたもので、組織委員会と撮影者の許可を得て掲載する。

2. 慶州へ

一参加者としては、学会に行くまでが一つのイベントである。韓国に行くのは今回が初めてであったので、韓国で開催されること自体は楽しみであったものの、準備段階においては、まず慶州ということで気分的にちょっと引いてしまったことも事実である。ソウルや釜山であれば、飛行機で行けば良いだけだが、そこから慶州へ行くとなれば結構大変なのではないかと思っていた。実際、釜山空港から慶州への送迎バスやタクシーの話題が視覚学会のメールグループで飛び交っていたし、Webでも釜山から慶州まで



図1 会場となったヒルトンホテルの入り口に掲げられた横断幕。



図2 受付でレジストレーションを待つ筆者 (左から3番目。筆者の左は前回の実行委員長の金子寛彦氏)。

の移動に関する情報はほとんど得られなかった(ハンゲルが読めればもちろん別)。

結局、私は学生とともに高知から福岡まで飛行機で行き、そこから水中翼船(Beetle)で釜山まで行く。そこからは韓国の超特急で慶州駅まで行くことにしていた。実際は高速バスで慶州バスセンターまで行けることが判りそれを利用することにした。英語で聞いてエクセレントバスというのに乗ったのだが、横に3シートしかなく、しかも水平近くまでリクライニングする。デジタルテレビもあり、走行中も映像にノイズが入ることはない。今までの人生で最も快適なバス旅行であった。しかもとんでもなく安く(邦貨で530円)、びっくりするぐらい速い(スピード制限が無いとしか思えない速さ)。最後はタクシーでホテルまで進んだが、とにかく速い。どの一般車よりも速いタクシーというのは日本ではまず見かけないという点で、驚かされた。

その夜は会場近くを散策する。韓国伝統大舞踊団(名称はたぶん正確ではない)のパフォーマンスがあったので、それを見ながらぶらぶらする。ホテル以外では英語はまず通じないのだが、その代わりに日本語が何となく通じる。湖の畔で噴水や花火を見ながら学生と食事。ここを慶州リゾートというのも納得である。

3. 学会

学会は、Chan-Sup Chung氏(Yonsei Univ.)の開会の辞により始まった。受付をしたときからの印象であるが、もちろんここでも、学会を主催する韓国側メンバーの並々ならぬ意欲が感じ

られた。

まずTie-Niu Tan氏(Chinese Ac. of Sci. Inst. of Automation)の「Intelligent Visual Surveillance」というタイトルの招待講演から始まった。続いて奥行きに関する口頭発表が4件、運動に関する口頭発表が5件行われた。ちなみに運動に関する発表は全て日本からの参加者によるものであった。昼食をはさんで、午後はポスターセッションがあった。ポスターは40件の発表が予定されていたが、いくつかのキャンセルがあったのは残念であった。ポスターの時間は2時間50分とやや長かった為であろうか、発表者がいないことの方が多かったものの、時間をかけてじっくりと見て回ることが出来たと思う。初日最後のセッションは眼球移動に関するもので、5件の口頭発表があった。

2日目は京都大学の江島義道氏の「Neural Correlates of Masking Effects and Simultaneous Contrast Effect, Revealed by Brain Activities in Visual Areas」という招待講演から始まった。マスクング効果や同時対比効果を起こす視覚刺激を呈示したときの各視覚領域における神経活動をfMRIで測定したもので、結果もグラフィックもクリアで美しいものであった。引き続き視覚神経科学と脳イメージングに関する口頭発表が4件と、空間視に関する口頭発表が5件行われた。1日目と同様に2日目も昼食をはさんで、午後はポスターセッションから始まり、36件の発表があった。その後、2日目最後のセッションとしてモデルに関する発表が3件あった。興味深いことにモデルについての全ての発表は日



図3 Chan-Sup Chung氏(Yonsei Univ.)による開会の辞。



図4 ポスターセッションの様子(写真は23日の様子)。

本以外からであった。

2日目の研究関連のセッションはここまであったが、特別講演として、Seonhee Jang氏(Sejong Univ.)プロデュースのダンスパフォーマンスが披露された。視覚関係者にとって興味深い舞台装置として、薄い羅紗の様な布の上にプロジェクターでイメージを投射するシステムが紹介された。布がいくつかの距離に複数設置されているので、複数の奥行きをもつ背景が舞台の上に形成されるものである(ホールの制約により劇的効果までは再現されなかった)。ダンスはゲーテのファウストを題材にしたものであったが、時間的な制約から正式な舞台の演目を40分に短縮したものであり、是非舞台を見たいと思わせるものであった。

引き続きお待ちかねの宴会である。でも今回は、宴会と呼ぶよりはバンケットと呼んだ方が良いフォーマルな印象であった。韓国側からYillbyung Lee氏(Yonsei Univ.)の軽妙な挨拶があり、続いて日本視覚学会会長の内川恵二氏(東京工大)の韓国語による挨拶があったが、当然私にはわからない。もちろん冒頭のみで後は英語である。ヒルトンホテルの着席パーティーということで当然豪華である。とどめはChoongkil Lee氏(Seoul Nat'l Univ.)のお嬢さんによる生ピアノ演奏であった。日本側参加者から、「日本ではここまでは出来ない」との話があったのも無理はない。バンケットの時に出了た冗談にも、「ACVはこれからどんどん豪華合戦になっていく気がするが、一回りして日本に戻ってきたときに大幅な簡素化が行われることだろう」という

のがあった。

最終日となる3日目は、Myung-Hoon Chun氏(Catholic Univ. of Korea)による「Rod Pathways in the Mammalian Retina」と題する招待講演があった。桿体からの信号が錐体神経系に入力するが、その際にOFF-cone bipolarへの接続は通常のシナプス結合なのに、ON-cone bipolarへの接続はGap Junctionであるという非対称な構造を示し、興味深いものであった。続いて色と形に関するセッションでの口頭発表が4件と、注意についてのセッションで口頭発表が5件あった。これで研究関係のセッションは全て終了した。

4. 学会を振り返って

さて、ACVでの研究発表の内容についてであるが、これだけの発表件数について個々にコメントすることは能力的にもスペース的にも無理だと思うので、全体的な傾向について報告したい。日本からの参加者は心理物理学とか非侵襲脳機能計測とかの発表が多く、日本視覚学会の夏季・冬季大会の英語版あるいは国際会議版という印象を受けた。これは参加メンバーが視覚学会の会員であることによると考えられる。その一方で、日本以外からの参加者の発表では、それらの分野に加えて生理学系やコンピュータビジョン系の発表もあり、各国参加者の人口比として見ると多い印象である。これは日本以外のアジア参加国においては、視覚系研究者の数がそれほど多いとはいえず、それぞれの分野に特化した研究会や大会ではなく、合同で活動することが多いためではないかと思われる。昔の



図5 口頭発表の様子(写真は23日の近江政雄氏の発表)。



図6 バンケットの様子(奥に生演奏中のピアノが見える)。

(といっても私は15年前までしか知りませんが) 日本での視覚研究会を見るような気がした。

ただ個人的に残念だったのは日本からの参加者以外からは、色覚関連の発表がほとんどないことであった。また私個人は、今回ポスターで発表したのだが、色覚関連の口頭発表は栗木一郎氏 (NTT) のグループの1件だけであった。今後は口頭発表も検討する必要性を感じた。

研究以外についての印象は、参加費や宿泊費は日本側参加者にはリーズナブルであったが、日本以外から参加した方、特に大学院生にとつては、割高感があったのではないかとも思う。もっともこれだけのホスピタリティーがこの価格で提供されるのはちょっと日本では考えられないことではあるのだが。

全体的な印象としては、やはり準備された韓国側の努力に尽きるのではないかと思う。1回目もそうであったが、各国ともACVを大事に考えていてそれを盛り上げようと頑張っており、韓国の研究者もその責務を十二分に果たしたといえる。もちろん日本側の関係者がACVの宣伝に努めたことで日本からの参加者が多数となった点にも触れておきたい。

この章の最後に、ちょっと余談を。こんな事を思っているのは私くらいなのかもしれないが、韓国や中国からの参加者の名前を覚えるのは誠に大変である。「李」さんなどと姓で呼んでも人物の特定にはほとんど役に立たない上に、アルファベット表記するとLiさんであったり、Leeさんであったりする。漢字を使えば多少覚えやすいのかもしれないが、それを正しく発音できないので英語会話では無意味である。結局人物特定のためには、アルファベットのフルネームで覚える以外の選択肢は無いことに気づくのであるが、姓名はともかく名前の方は日本人には発音すら難しい。よってスペルと発音は別に覚えることになる(発音からスペルが書けない! DavidやJohnとは大違い)。これでは1人覚えるのに必要な情報量が多くなりすぎる。皆さんはどうされているのだろう。実際の所、この報告書に出てくる方々のお名前を正しく書くために、

ACVの各委員や視覚学会の世話人の皆さん、Vision編集の鶴飼一彦氏にご厄介になりました。この場を借りて感謝します。

5. 議論

2回目にして順調な発展を迎えているACVであるが、もちろんこれから皆さんで話し合っていないといけない課題もあるように感じた。それらをこの議論の章で少し述べたい。

前回金子氏も指摘していたが¹⁾、ACVの位置づけが今後の最大の議論となろう。またACVの運営のあり方にも様々な意見が出ることと思う。まだ2回を経たのみであり、いずれにしてもしばらくは開催される国の研究者主導で発展していくことになるだろう。今回のACVでは、ホテルやバンケットの準備などにも力が入っていた。今回はなかったが、将来的には観光(excursion)が用意されるようになる印象もある。各国の第1回目の開催という事で、一巡するまでは豪華路線が続くのではないか。個人的には派手なのが好みなので、割と心地よく感じている。将来、実行委員会メンバーの負担を減らすような形になっていくのか、あるいはECVPのように豪華路線が継続していくのかについては興味がある。

実のところ、そうやって各国を一巡した後が勝負であろう。おなじみのARVO、ECVP、VSSや、最近出来たOSAの視覚グループのミーティングなどの多くの国際会議の間で、どのようにしてACVに他と異なった魅力を持たせていくのかという点が今後議論されていくことと思う。日本視覚学会の場合のように、各専門分野での仲間内といったものにアジアの研究者がどんどん入っていくことになれば、研究の発展にも大いに寄与することになるし、発表が無くても参加することになる。当初の狙い通りの気軽であるが質の高い国際会議になっていくことを期待したい。

実際の発表の時に課題だと感じたのは、ポスターセッションで日本からの参加者が日本人に発表する時は、どうしても日本語での説明と

なってしまう点である。これには珈琲時間における議論が日本語で行われていることも含まれる。正論をいえば、これでは日本からの参加者以外の参加者は、あまりポスターセッションに参加した気にならないのではないかとということになる。韓国からの参加者を中心として(中国からのポスター発表予定者の多くがパスポートの関係で参加できなくなってしまったのは誠に残念であった)、日本以外からのポスターでの良いもの多々あり、かつそのようなポスターの回りでは参加国を問わず多くの研究者が集まって熱心に英語でのディスカッションが行われていただけに、日本からのポスターの前には日本人がほとんどであったという状況は少し残念である。

もっとも我が身を振り返って考えると、これはそう単純な問題でもない。もともと、ACVをはじめた動機の一つとして「学生などの若手研究者に身近な国際学会を作る」という説明を頂いていたが、そこでの議論では、既存の英米での学会は「時間的、金銭的、心理的な距離がある」ということである。時間や金銭はともかく、英語でディスカッション出来るかどうかは「心理的な距離」には大きく寄与すると思われる。いきなり英語ディスカッションが出来るわけもなく、どこかで無理をして国際会議の参加回数を増やさなければならぬのは事実である。下手な英語であまりよくわからないプレゼンをするのか、日本語でとにかく研究内容のディスカッション重視でいくのかという、この辺は地方大学で学生を指導している身にとっては苦しいところである。

また将来においては、アジアの研究者はもちろんのこと日本にいる研究者の中で、日本視覚学会の大会にはあまり参加しないがACVには参加する、という層の開拓もまた必要であろう。ECVPでは視覚学会ではあまりお目にかかれぬ心理学系の研究者(日本心理学会をメインの発表場所としている研究者など)と知り合いになれるのが楽しみだし、ARVOでは(逆に?)眼科学系の研究者と話す機会が多い。ACVでは日本からの参加者という点で、日本視覚学会の枠を

越えるところまではまだいっていないように感じる。もちろんアジアの研究者の発表が聞けるところにACVの最大の意義があるとは思っているものの、数的には多いとはいえない。日本視覚学会の国際会議版としてだけでなく、様々な分野の人が集まるようになっていってほしいものになるだろう。

6. おわりに

ACVの最後のセッションとして、Choongkil Lee氏(Seoul Nat'l Univ.)より今回のACVに関する報告があった。またKeetaek Kham氏(Yonsei Univ.)をはじめとする若手のスタッフも紹介された。端から見ていてもKham氏らの活動は大きな貢献であった。最後にChao-Yi Li氏(Chinese Ac. of Sci.)よりThird ACVのアナウンスがあった。日程は2003年の11月終わり頃から12月のはじめ頃付近に設定された。このThird ACVの詳細についてはこのVisionを読み続ければ告知があるはずである。夏から日程がシフトしたのは、日本視覚学会の世話人の方々が実施されたアンケート調査で、「夏の視覚学会を残して欲しい」という要望が多かったことによると伺った。少なくともうちの研究室にとっては、夏の視覚学会は学生への教育的見地から大変重要な役割を果たしていた一方、ACVへの参加も望ましいものであったので、個人的にはうれしい事となった。

もっともあの季節でなければ四川料理の中心地の重慶で学会という話になろうはずもない。Chao-Yi Li氏より、重慶やその付近の観光地の紹介があったが現地もプレゼンも見事なもので、あれでThird ACVへの参加を決めた方も多かったのではないかと。私も参加費を稼ぐための研究費申請に気合いが入った。実行委員メンバーでもない私がいうのも少し変ですが、それでは皆様重慶でお会いしましょう。

文 献

- 1) 金子寛彦: First Asian Conference on Vision 報告. *Vision*, 14, 21-23, 2002.